

# 沖

俳句雑誌[おき]

6月号

沖 発行所

## 十三回忌

朴咲けり不壞の宝珠の朴咲けり

登四郎

この句は我が家のシンボルツリーである朴の木が何十年ぶりに花をつけた時に、父登四郎が詠んだものである。上五、下五で二度「朴咲けり」と詠んでいることからもその感激ふりが窺える。平成九年の作だが、飛騨高山から送られた朴の木は二階の屋根をはるかに越す大きな木となった。

朴散りし後妻が咲く天上華

登四郎

母が亡くなった昭和五十八年の作である。我が家から母を見送ったが、その時も朴の木は静かにそれを見守ってくれた。

毎年咲く花の数は違って、不成りの年は五つ位の時もあるが、今年は連休の少し前に一花が咲いて以来三十以上の花をつけてくれた。

朴の木に意志があるのかもしれないが、父の十三回忌を偲ぶために沢山の花が供花として咲いてくれた。

十三回忌の法要は菩提寺の谷中の延寿寺で、十八日に家族親戚が集まり執り行った。

# 様子がいい

能村 研三

木の家に木の節あまたあたたかし

茎立の雨に一日が長きかな

だんまりに筋を通して独活膾

ケロリンの湯桶が響く花月夜

吊橋のたわみに添うて鳥帰る

春 闌 け て 川 面 な だ め の 清 掃 船

舟 う ら ら 塩 商 ひ の 運 河 あ り

行 く 春 に 庵 た た む 日 思 ひ を り

悼・鈴木鷹夫さん

さくら冷「様子がいい」と江戸ことば

朝 掘 り の 筍 並 ぶ 寸 の 順

七回忌の時は、延寿寺がごたごたした問題を抱えていた時で何か落ちつかない雰囲気にあつたが、今回は新しく立派なご住職を迎えた。私も寺の檀家総代としての役を頂いて初めての法要であつたが、平穩な気持で父を偲ぶ法要となつた。

「沖」も先師が亡くなって十二年となつたが、この間創刊四十周年、登四郎の生誕百年、そして昨年五百号という大きな節目を越えてきた。

「沖」の会員、同人の中でも先師の聲咳に触れない方々も多くなつてきたが、もう一度先師の創刊の志に思いを寄せ、「沖」としての伝統と新しさをめざす俳句を作っていくことが、先師へのせめもの供養と思ふ。

今年は朴の花が咲いている夜に風が強い日が多かつた。葉はやわらかいので、かなり痛めつけられたが、花は大風にも耐えて翌日まで散ることなくもつてくれた。

天上に父のちからの朴一花

研三

能村 研三

# 蒼茫集



さびしいぞ

安居 正浩

屋上庭園

上谷 昌憲

ラッピングして卒業の花になる  
日だまりと言へど土筆はさびしいぞ  
延々と夢延々と春の闇  
目借時こんな所に塗り葉  
猫の恋現在進行形である  
四苦八苦して上出来の接木かな

春まだき屋上庭園水走る  
尻上げて自転車を漕ぐ春休  
急斜面しかも走り根花筵  
満つるとは力抜くこと花吹雪く  
鷹鳩深淵 鈴木鷹太さんと化して一門普門かな  
花冷や死者の鼻梁の粹なこと

いのちもろ手を

辻美奈子

辰砂ぼかし

北川英子

巢立つ日のいのちもろ手を溢れをり  
ともだちに先に泣かれて卒業す  
思春期の子が逃水にさしかかる  
花季の日暮のいつもなつかしき  
をみなごに大足のあり夏近し  
ぼうたんの純白はひと拒みけり

夢殿のゆめ流れ出づ御開帳  
西空の辰砂ぼかしに夕永し  
今年また最後かもねと初ざくら  
初燕ようこそ線量かいくぐり  
花薙ノンアルコールはかなり酷  
うららかや余命とことん甘やかし

三鬼忌 林昭太郎

春光へしゆるんと飛んで鉋屑  
赤子の掌つねに湿りて桜東風  
水筒に小さな磁石山笑ふ  
三鬼忌の出さぬ手紙に貼る切手  
鳥籠六箇に鳥のブランコ春深し  
石二枚ずしりと据ゑて橋遅日

土筆の袴 田所節子

湯引きして魚ちぢまる桜冷  
太陽に磨かれ木々の芽吹きけり  
風神に切られてしまふ凧の糸  
待春のたたまれてある車椅子  
子と九九を唱へ土筆の袴とる  
新緑の朝をたたふる禽の声

往復切符 千田百里

陽炎を追へば花屋に吸ひ込ま  
止め腕に木の芽の浮ける遠忌かな

抜小路より袋小路へ花の塵  
引鳥に往復切符持たせやろ  
「俳」仲・節本豊大條二句の人逝く春のカチカチ山目差し  
三師待たるる春存分に語られよ

明治硝子 荒井千佐代

隣り合ふ武家と蛸が家さはら東風  
春陽に明治硝子の気泡かな  
いぬふぐり空の瑠璃また海のるり  
円陣を解きし漁舟桃の昼  
藻絡みの舳綱の張りや涅槃変  
潮紋も宵の色なる桜かな

花驟雨 甲州千草

狐穴手の奥の明るき花驟雨  
花過ぎの雨打つ紙の博物館  
袖口に時計の透ける若葉風  
桜薬ふる石二つ繋ぐ橋  
馬場跡の窪みを均らす春落葉  
春蚊ふはりとセロテープ貼る途中

天と地 大川ゆかり

さへづりやしつかり食べる朝ごはん  
柴犬の巻き尾ふはふは蝶の屋  
桃咲くや字画に天と地のありて  
春風や六方焼きの黄金色  
桜道スケートボード折り返し  
闇みづみづし満開の花の中

足力 藤原照子

葺替への縄締む若き足力  
残雪と別れて海へ北ほく線  
読む食す化粧ふ一卓春ともし  
逡巡の果てなる鴨の残りけり  
桜蕊降る元禄の馬場の跡  
大しだれざくら葉となる静寂かな

火の国 楠原幹子

四歳児に言ひまかされてあたたかし  
大河たうたう菜の花を置き去りに  
黄砂襲来火の国をくすぶらせ  
満開のさくら空気の重くなり

春愁を描くかに白かさねをり  
倉庫よりサツクス聞え夕永し

古文書 宮内とし子

花冷の古文書に置く湿度計  
春愁のマナーモードの震へかな  
蝌蚪群れて同じ動きの同じ形  
遅き日の膝にあまりし重き辞書  
石窪に花屑残し渡月橋  
煉瓦塀歴史とどめて花は葉に

線画 湯橋喜美

梨花満ちて三反畑風平ら  
智恵づく子賞めも叱るもチューリップ  
狼藉は風が癒せり露を刈る  
さくら薬降り積み進入禁止札  
春昼の道使ひきる子の線画  
緩急の見える牡丹過ぐる風

情つ張りの味 久染康子

六義園と古河庭園飛花交流  
妹背山の青葉隠れに舳ひ舟  
緑立つ支柱あまたの名木に

花は葉に野外授業の呼子笛  
花過ぎて訪はねばならぬ人の居り  
穂の芽を情つ張り味と覚えけり

貴船川床 広渡敬雄

父の日やナイターの芝眩しみて  
モノトーンの一塊として冷蔵庫  
白南風や九州男児廃れたる  
回し飲むぬるき麦茶やサツカー部  
合戦の寝返りの篇蚊遣香  
木洩れ日も馳走としたり貴船川床

花吹雪 森岡正作

語部の口上花を哀しめり  
花吹雪浴びて出番のなかりけり  
滅びたる者のさざめき花篝  
花冷の野点に膝を詰め合へり  
枝垂るる木一途に枝垂れ春逝けり  
花は葉に庭師に松の若返る

藤代峠 千田敬

夜ざくらや鬼のたぐひも往き来して  
さくら餅戦後の飢を知る人と

馬酔木ゆるる勅使の沓の和のひびき  
水分石春を惜しみてせせらぎて  
六條三司  
藤代の峠に望む江戸の春  
吉保の池の水皺やうらけし

梅若忌 鈴木良戈

開抜ける疾き川風光りけり  
寝不足に口あたり良き海雲汁  
川波の荒ぶる風や梅若忌  
春の鴨追はれ着水傾ぎけり  
孫も子もみな散り散りに卒業期  
春陽射し香りたちたる嬰の尿

寵愛 大畑善昭

金縷梅の咲きそれからの時間かな  
太陽の寵愛の大いぬふぐり  
境内のぐるりの汚れ春日焼  
梅咲いて三回忌とは一跨ぎ  
せせらぎは一日おしやべり耕人に  
帰りにも逃水のゐる葬りなり

# 潮鳴集



メモ用紙

佐野ときは

アルバムの黒き台紙や昭和の日  
げんこつで叩くグローブ揚雲雀  
ほろ酔ひの耳を鎮める桜東風  
チューリップ箍の外れしやうに散り  
春愁や筆圧残るメモ用紙

落 款 安藤しおん

蜥斜に足K I T T E地下街彩小管  
落雲雀雲のポケット裏返す  
吉保の落款六義園三句ぼんと紅つつじ  
蓬莱島にたたむ暮春のあを水輪  
荒むしる土橋十歩の春惜しむ

つつじ騒

大沢美智子

初花やひんやり乾く夜泣石  
潮の目の荒砥びかりにあらせいとう  
まだ濡れてゐる春筍の鍬のあと  
きのふ根津六義園吟行二句けふ駒込のつつじ騒  
鳥語満つ「尋芳径」はなとこみち夏はじめ

鳥の目 富川明子

鳥の目が欲しくぶらんこ起ち漕ぎす  
春風やざらめ一さじ綿菓子に  
改札を通さぬ切符海市行き  
水平に夜をけふらせて梨花の棚  
春夕焼更地に遅々と上総掘り

# 沖作品



# 能村研三選

一通のはがきの裏の雛まつり  
絵手紙の表書きにも春のいろ  
雨粒の一つ一つの木の芽かな  
杉材の肌理うつくしき春障子  
蛇穴を出づ竹林に日矢ふかき  
はらわたのありさうもない桜貝  
後ろにも正面のあり花万朶  
花万朶思ひ出す人みな鬼籍  
花ミモザドレッシングはよく振つて  
げんげ田に手足の籬を外しけり  
裏山に春がぐづぐづしてをりぬ  
春炬燵窓が四角に暮れてゆく  
阿蘇野焼父の記憶の色であり  
恋はややし人の世も猫の世も  
人間をたまに信じてあたたかし

東京

磯貝 尚孝

関根 瑤華

神奈川県

菊川 俊朗

かぎろへり校歌に謳ふ島の海  
島は春留守を預かる巫女ふたり  
ふらここや島折り返す定期船  
天心の影を濃くして鶴引けり  
引鶴のこゑ逆縁を悼むかに  
六十日雪階上がる暮しかな  
白き野に見えぬ早春さがしをり  
天辺はまだ三寒の動かざる  
笹子鳴く札所の堂はまだ開かず  
ランドセル小さくなりて卒業す  
青き踏む自然治癒力信じつつ  
家系図をたどる指先臙の夜  
こともなし常陸風土記の野に雲雀  
ユトリ口の白に春愁深めをり  
芽柳や洋食屋とある硝子窓

長崎

水木 沙羅

山形

佐藤 淑子

市川市

塙 誠一郎

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研

一通のはがきの裏の雛まつり 儀貝 尚孝

最近絵手紙ブームで、素人の方が気軽に絵を描き好きな文章を書き添えて、親しい友人に送ることが多くなってきた。ちよつとした手ほどきを受けるだけで、結構面白いものが出来て、もらった相手も楽しく鑑賞できる。一通の葉書が届いた。親しい間柄の人からの手紙であったが、裏をひっくり返してみると、お雛様の絵が見事に書かれていた。中々忙しくお雛様を飾る機会が少なくなつてしまつた昨今、一通の手紙をもらっただけで、楽しい雛まつりを迎えることが出来た。

はらわたのありさうもない桜貝 関根 瑤華

桜貝はその可憐な美しさから、古くから詩歌に詠まれてきた。小指の先ほどの大きさしかない小さな二枚貝で、貝殻を見ると色も形も桜の花びらに似ているのでこの名がある。しかし、この句はそんな美しさを讀えながらも、逆の視点から切り込んできた。桜貝にはらわたがあることなど誰も想像が出来ることではなかつたが、作者はあえて桜貝にはらわたがあつてもおかし

くないと考へた。しかし、その想像も「ありさうもない」と否定したことで決着をつけた。

春炬燵窓が四角に暮れてゆく 菊川 俊朗

ややニヒリズムを感じさせる句である。春になつても、寒の戻りで急に寒くなることがあるので、ついつい仕舞いかねる炬燵。あればあつたで、つい潜り込みたくなる。無くてもよさそうだが、あれば何か引きつける魅力がある。そんなアンニュイな一日を日がな炬燵から離れることなく夕方を迎えた。「窓が四角に暮れてゆく」の措辞の中にも倦怠感が滲み出ている。

かぎろへり校歌に謳ふ島の海 水木 沙羅

校歌は在学中もさることながら卒業して社会人となつてもいつまでも思い出が残るもの。特に島の学校の校歌は、周りの海の風景を讀えて歌われる。校歌の海は自分たちの誇りとする景色でもある。ところで、長崎県の福江島にある五島高等学校の校歌が、歌詞が奈留島にはそぐわないものであつたので、当時在学中だつた二年生の女子生徒が、ラジオの深夜番組に「校歌を作つてほしい」と手紙を出し、松任谷由実の「瞳を閉じて」という愛唱歌が卒業式などで歌い継がれている話もある。

六十日雪階上がる暮しかな 佐藤 淑子

佐藤さんは山形の月山の近くに住まれる方。雪国の暮しぶりを詠んだものだが、この句からもその生活がいかに大変であることがうかがえる。月山付近は、積雪十五メートルを越す豪雪地帯。雪の階段で二階へ上がるような暮しが続く。(以下略)